同友 Aichi

2012年（平成24年）
8月1日
愛知中小企業家同友会
〒460-0003　名古屋市中区錦三丁目5－18号
京枝屋ビル4階
ＴＥＬ（052）971－2671㈹
ＦＡＸ（052）971－5406
・Ainet　http://www.douyukai.or.jp/
・Ｅメール　aichi@douyukai.or.jp
編集責任者 広報部長　宇佐見　孝

◇同友会三つの目的◇

1. 同友会は、ひろく会員の経験と知識を交流して企業の自主的近代化と強靭な経営体質をつくることをめざします
2. 同友会は、中小企業家が自主的な努力によって、相互に資質を高め、知識を吸収し、これからの経営者に要求される総合的な能力を身につけることをめざします
3. 同友会は、他の中小企業団体とも提携して、中小企業をとりまく社会・経済・政治的な環境を改善し、中小企業の経営を守り安定させ、日本経済の自主的、平和的な繁栄をめざします。

紙面案内

2面▶　障害者雇用の実例から学ぶ（6月11日）
3面▶　ステップアップ研修（6月15日）
4面▶　地区のページ
5面▶　小グループ活動レポート
6面▶　農業部会（6月22日）
7面▶　愛知県信用保証協会と懇談（6月29日）
8面▶　写真で見る50周年式典

各地同友会会員数（7／1現在）

北海道	5,571名
愛　知	3,230名
大　阪	2,728名
広　島	2,381名
東　京	2,005名
福　岡	1,980名
全　国	41,930名

歴史・知恵・夢をつなぎ、未来へ

～50年の足跡を踏みしめ、時代を切り拓こう

創立50周年記念式典

7月9日

道なき野にみちを拓く

七月九日に愛知同友会創立五〇周年記念式典がウェスティンナゴヤキャッスルで行われ、行政、他団体、金融・報道・教育機関や全国同友会役員など来賓一三六名と愛知同友会会員をあわせて約九〇〇名が参加しました。

式典では五〇年間を写真で振り返るオープニング映像から始まりました。開会挨拶は杉浦三代枝会長が行い、一九六二年に三四名からスタートし、自助努力の精神や、経営環境の改善活動の足跡を紹介。「道なき野にみちを拓く」決意を述べました。

愛知同友会50周年式典に行政・他団体・他県同友会の会員を含め900名が参加

パネリストの「本音」発言に思わず笑みがこぼれる（パネル討論）

先駆性と時代適応性

続いて愛知同友会の創立会員四名に感謝状と記念品の贈呈が行われました。その後、「愛知同友会五〇年史」著者の渡辺俊三氏（名城大学教授）の講演が行われました。

渡辺教授は、愛知同友会の運動史の特徴を紹介。「先駆性」として、同友会の理念や活動の最初の苗床を提供してきていること。また組織のあり方を硬直化させず時代に応じて柔軟かつ大胆に変革を行ってきた「時代適応性」を強調しました。

興味深い歴史の一コマが語られる（パネル討論）

歴史に学び現在を理解することは、将来を見据えて「何をなすべきか」を考える事につながり、未来への展望は開かれると指摘しました。

過去から現在　そして未来へ

引き続いて歴代の代表理事のパネル討論が行われました。初代代表理事の遠山昌夫氏（菊水化学工業・最高顧問）、一九九五年から一〇年間代表理事を務めた鋤柄修氏（エステム会長）、そして、現在代表理事を務める加藤明彦氏（エイベックス会長）が登壇しました。

「創立時、明日生き残るにはどうするか、手探りの活動から理念や地区組織などの基礎ができた」（遠山氏）

「バブル崩壊後の会勢停滞期に、活動や組織を改善し、企業・地域づくりの方向性を明確にして発展につながった」（鋤柄氏）

「にっぽんど真ん中祭り」の踊り（懇親パーティー）

「愛知モデルとは」を説明する渡辺教授（記念講演）

「中小企業憲章の『社会の主役』として地域・経済の担い手として相応しい企業をめざす」（加藤氏）

このような、愛知同友会の創立期・転換期・現在とこれからについて、興味深い歴史の一コマが語られました。

「中小輝業」に

「中小輝業へ、そして日本一の愛知へ～世界を見据え、地域に生きる」をテーマにした「二〇二〇ビジョン」が発表されました。この「中小輝業」は、企業の規模よりも、企業の存在そのものを重視し、企業規模は小さくても輝く企業であれという意味であることが説明されました。

着座スタイルで行われた懇親パーティでは、会員扮する武将隊や、会員によるジャズの生演奏・マジックショー、そして参加者も加わっての「にっぽんど真ん中祭り」の踊りが会場中で行われるなど最高潮に達しました。

後日、来賓の方から「手づくりながらも、これほどよく練られ情熱のこもった記念式典は、これまで出会ったことがないです。愛知の中小企業家の底力、情熱の凄さに感じ入った次第です」とのお礼を頂きました。

このように、愛知同友会の五〇周年を祝うとともに、五〇年間の歴史から学び、未来へ向けての新たな決意を固める場となりました。

どっぷりき

▼戦後六七回目の八月。遙かなる時を思い浮かべた。一七歳、高知からの復員兵が、無蓋貨車から焼け野原の広島を見た。原爆投下から一カ月後であったか。瞬時に、そして次々に一五万余名が死に至り、今日まで後遺症で苦しむ人がいる。第二次世界大戦で何千万人が亡くなった。それぞれに名前があり、家族、友人がいた。人生は戦争で絶たれた。広島出身の一四期甲種飛行予科練習生の幾人かは、家族は全滅。特攻訓練基地の本人たちは生き残った。貨車は下関に向かった。無謀にも、少年の目指した故郷は中国の大連で、父母や弟が残留していた▼前年の一九四四年秋、四国松山港から軍艦に乗って瀬戸内海を渡り、呉市に上陸。戦艦大和建造のドックを左に見て、呉海兵団を見学。分散して少年は集会所に泊まる。一日だけの呉であった。以後ここも焼け野原となった。今ではドックが大型のタンカーを造船している。海兵団跡には海上自衛隊の教育隊が新築され、旧集会所はそのまま、古くさく頑強に残っている▼呉駅の海岸側に建つ「大和ミュージアム」（呉市海事歴史科学館）。館長の戸高一成氏は戦後生まれで、ＮＨＫの放送で大反響の、海軍指令部関係者たちが座談した「海軍反省会」の録音テープの保存者。「歴史には、素晴らしい、誇らしい事実もたくさんあります。しかし、二度と繰り返してはならない歴史も多いのです」「太平洋戦争を日本の歴史のなかの最後の戦争とするためにも」（「日本海軍はなぜ過ったか」戸高氏共著）と書いているが、僅かでも実体験した者としては、その言葉を信じたい。

創立会員　浅海　正義